

東日本大震災に関するボランティア活動への 参加を左右する要因の検討¹ —宮城県内の大学に在籍する大学生を対象に—

木野和代

2011年3月11日に太平洋三陸沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、東日本大震災を引き起こし、東日本一帯に未曾有の被害をもたらした。沿岸部では津波による被害が大きく、内陸部においてもライフラインの停止や物流の滞りにより、日常生活に大きな支障が生じた。このような被災地の惨状は、繰り返し報道され、その惨状に大きな衝撃を受け、心痛めた人も多いであろう。現在も被災地には全国から様々な救援・支援の手がさしのべられ続けている。

しかし、東日本大震災はこれまでにない広範囲で大規模な被害であったにもかかわらず、震災直後のボランティア活動者数は、ボランティア元年²とよばれた1995年の阪神・淡路大震災の時よりも少ないという。例えば、桜井（2013）によれば、東日本大震災における発災後1ヶ月以内の大規模被災県（岩手・宮城・福島県）のボランティア数は、阪神・淡路大震災の発災後1ヶ月以内の参加数の2割程度であったという。ここで参照された東日本大震災に関するデータは、全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター（2012）によるものである。この報告書において報告された数値は各市町村に設置された災害ボランティアセンターを経由した活動者数であり、これを経由しないNPO等での活動者数は計上されていない。そして阪神・淡路大震災時のボランティア活動者数とは算出方法が異なるため、単純な比較は困難であると説明されている。しかし、被災地と災害ボランティアセンター等の概況の記述からは、地理的距離やガソリン不足、道路状況、物資不足、受け入れ態勢の整備の問題などにより、被災地外から被災地への直接支援は鈍りがちであったことが読み取れる。発災後3か月の時点では、すでに被災地でのボランティア減少を危惧する報道もなされている³。さらに、被災者か

1 本研究は、著者が担当した2011年度1次生向け科目（心理行動実践セミナー）の一環として収集したデータを、受講生の了承を得て再分析したものである。本データを用いた分析結果は、日本感情心理学会第21回大会において報告された。大会当日にいただいた様々なご示唆に感謝申し上げます。

2 1995年の阪神・淡路大震災は多くの市民ボランティアの自発的な支援活動を触発し、ボランティア活動に対する社会的な関心が高まるきっかけとなった。このため1995年は「ボランティア元年」と呼ばれている(鈴木・菅・渥美, 2003; 桜井, 2013, 他)。

3 朝日新聞（大阪本社）2011年6月19日朝刊（35面）ボランティア先細り

らは「同じ人に来て欲しい」といった声もあり、継続的な参加が可能な環境作りの必要性が報じられている⁴。

ところで、渥美・杉万・森永・八ツ塚（1995）は、ボランティアをその活動内容により国際・地域・福祉・災害の4つに分類している。国際ボランティアは活動範囲が国際的であること、地域ボランティアは居住地域の住民による活動であること、福祉ボランティアは活動の継続性と対象の個別性、そして災害ボランティアは活動の一過性と対象の匿名性が特徴としてあげられている。さらに、ボランティアの種類によって参加者層が異なることが指摘されており（玉木，2000）、阪神・淡路大震災での災害ボランティア活動については、ボランティア活動に初めて参加する若者が多く、参加者の4から6割が大学生であったことが認められている（鈴木・菅・渥美，2003）。

東日本大震災に関するボランティア活動（以下、震災ボランティア活動）への大学生の参加に関しては、文部科学省がこれを支援する姿勢を示している。具体的には、学修成果等を活かすことに加え、将来の担い手としての期待といった、大学生が震災ボランティア活動に参加する意義を考慮し、大学生の活動参加のために学修上の配慮（評価や休学への対応）を大学側に求める文書が、2011年4月1日付で文部科学省から出されている（文部科学省，2011）。

先述のような地理的距離などの問題や継続的参加の可能性を考慮すると、今回のような大震災においては、発災の一定期間後に物理的および精神的な安全やゆとりを確保できた地元の人々による支援が期待されよう。実際、被災地にあつて個人的には仕事や学業に臨める状態にありながら、一時的に休職あるいは休業状態にならざるをえなかった社会人、新学期開始が1ヶ月ほど遅れた大学生⁵などの震災ボランティア活動参加があつたと聞く。大学生の震災ボランティア活動への参加は、文部科学省が指摘する将来を担う青少年育成という点でも意義深いと考えられる。本研究では、被災地の大学生の震災ボランティア活動への参加に焦点を当てる。

被災地の大学生たちの被害の程度は単純には比較できないが、自分自身や親しい人たちの安全と生活が確保された後は、より被害の大きかった人たちの力になることを考えた者も少なくないであろう。前述のとおり新学期開始が遅れ、時間に多少余裕ができ、自身がさまざまな人の助けを借りた恩返しへの気持ちなどが高まつた大学生もいよう。また、本研究に取り組んだ大学生たちの中には、震災後の惨状が継続的に報じられる中、自分の受けた被害は主観的にはさほど大きくなく、そのことに罪悪感を覚えると同時に、困難を強いられている人たちの手助け

4 朝日新聞（東京本社）2012年4月30日朝刊（29面）（防災 復興）今、必要なボランティアは

5 文部科学省（2011）によれば、岩手・宮城・福島は3県では、すべての大学が4月の始業を延期しており、8割以上の大学では始業が5月以降に延期されたという。

をしなくてはならないという気持ちを強く抱いた者もいた⁶。

しかしそのような気持ちを持ちながらも実際の参加となると、「邪魔・迷惑になるだけではないか」あるいは「危険ではないか」という思いや、思い入れの強さゆえに現地の惨状を見ることに不安を感じ躊躇した者⁷もいたと思われる。本研究の計画・実施にかかわった大学生たちがその一例である。被災地の大学生たちの震災ボランティア活動への参加において、最初の一步を踏み出すことを後押ししたのはどのような要因であろうか。また、継続的な参加が期待される活動もあり、こうした活動には地元の大学生の力が必要とされるであろう。したがって、継続を促す要因についても検討が必要と考えられる。

そこで本研究では、被災地の大学生の震災ボランティア活動への参加・再参加を左右する要因を検討する。具体的には、(1) 震災ボランティア活動への参加を促進あるいは抑制する要因について、参加意欲、参加希望理由(動機)および震災ボランティア活動に対する印象の違いに着目して検討する。また、(2) 参加経験をもつ者に関しては、再参加を促進あるいは抑制する要因について、参加意欲、参加希望理由、初回参加時の参加経路や参加時の経験、参加前後での活動に対する印象の変化をとりあげて検討する。

なお、ボランティア活動への参加およびその継続を左右する要因としては、個人特性としての共感性(浅川・仲上・古川, 1998)や参加意欲(高木・玉木, 1996)、援助成果の大きさ(妹尾・高木, 2003)や組織的な活動におけるその組織への帰属意識の高さ(安藤・広瀬, 1999)などさまざまな側面が検討されてきている。災害時の支援活動に関しては、被災地との地理的距離やその災害に対する危険認知度(佐々木, 1999)、仲間との思いの共有や代理経験(松下・中川, 2007)、過去の継続的なボランティア活動経験(桜井, 2013)なども言及されてきた。本研究では、個人の性格特性にかかわる問題よりも、活動参加を促進するための環境整備や働きかけについての情報が得られるように、活動に対する認識や参加動機、個人の経験に関する側面をとりあげることとした。

参加動機に関する検討もこれまで多くの研究でなされてきたが、参加動機として扱われる側面は研究により異なることが多い。ボランティア動機の代表的な分類としては、Clary, Snyder, Ridge, Copeland, Stukas, Haugen, & Miene (1998) のVFI (the Volunteer Functions Inventory) モデルがあげられる。これはボランティア動機をその機能という観点から整理し

6 同様の事例が朝日新聞(東京本社)2011年5月11日朝刊(1面)自分だけ申し訳ない(シリーズ: いま子どもたちは一震災を生きる)でも紹介されている。

7 阪神・淡路大震災においても、ボランティア活動への参加を躊躇した大学生が存在したことが報告されている。森上(1998)は、大阪の女子大学生によるレポートの分析から、阪神・淡路大震災における災害ボランティア活動に参加しようと思いつつも実行できず、「なにもしないのもつらい」と感じ、自己批判に陥っている大学生の存在を指摘し、これを「ボランティアためらい症候群」と呼んでいる。そして彼女らも非被災地の被災者であるとしている。

たものであり、価値機能（利他的な価値観や主義を示す）、知識機能（活動参加による知識習得・技能向上など）、社会的機能（友人を得る、親しい人が重視している活動である）、キャリア機能（現在・今後のキャリアにかかわる経験をする機会）、防衛機能（罪悪感などの不快感情の低減など）、強化機能（自尊心を高めるなど）があげられている。ただし、災害ボランティアのように緊急性の高い支援活動における参加動機には、これら以外の側面も存在する可能性がある。高木・玉木（1996）の研究では、緊急事態での援助を含む援助行動の動機を帰納的に把握しようとした高木（1983）の研究をもとに、阪神・淡路大震災での活動参加の動機が検討されている。そして次の7つの動機が見いだされている。①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容、②援助要請への応諾（誰かに頼まれやむなく引き受けるなど）、③利得・損失計算、④良い気分の維持・発展、⑤好ましい援助・被援助経験、⑥被災地との近接性、⑦被災地や被災者への好意的態度、である。これらをVFIと完全に対応させることは難しいが、①の項目内容の一部はVFIの価値機能と対応し、②は社会的機能に近い意味合いをもち、③は広い意味で全ての機能との重なりがあると考えられる。しかし、これら以外は、対応するとみなしうる内容がみられず、特に⑥⑦については災害ボランティアに特化した内容であると思われる。また、阪神・淡路大震災での災害ボランティア活動参加者の特徴を検討した鈴木他（2003）によれば、参加動機にはマスメディアを通して被災地の惨状を知り、「衝動」的に参加したというものが含まれることが示されている。したがって本研究では、これらの研究を参考に、災害ボランティア特有の側面、本研究に取り組んだ大学生たちの意見および質問量の適切さを考慮して、参加希望理由をたずねる項目を独自に用意することとした。

方 法

1. 調査対象および手続き

宮城県内の大学に在籍する大学生350名（男85名、女264名、性別無回答1名；年齢範囲は18～23歳）を対象に質問紙調査を実施した⁸。協力依頼に際しては、強制ではないこと、非協力による不利益は一切ないことを十分に説明し、同意を得られた場合にのみ回答を求めた。実施時期は2011年10月中旬～下旬であった。

⁸ 調査協力者の募集に際しては、大学の講義時間を利用して案内した。この他、震災ボランティア活動に参加した可能性がある知人にも協力依頼の声をかけた。これは、本研究では震災ボランティア活動への参加群と不参加群の違いを比較検討するのが目的であり、参加経験がある者を一定数確保する必要があったためである。したがって、本研究で示される震災ボランティア活動への参加率は、宮城県内の大学生全体の実態を正確に反映しているとはいえないことに留意されたい。

2. 調査内容

震災ボランティア活動に関する以下の質問紙A～Cを一組にして配布し、質問紙Aの設問A-（3）の指示（後述）に従い、質問紙AとB、または、質問紙AとCへの回答を求めた。

1) 質問紙A：全ての調査対象者が最初にこの質問紙に回答した。

A-（1）震災ボランティア活動への参加意欲：発災後から9月までを、①震災発生後～3月末まで、②4月中、③5月中、④6月～7月、⑤8月～9月、の5期に分け、各時期について、「絶対参加したくない（1）」「できれば参加したくない（2）」「できれば参加したい（3）」「是非参加したい（4）」の4段階で評定を求めた。

A-（2）震災ボランティア活動への参加希望理由：前問で1期間でも参加意欲を示した（「できれば参加したい」または「是非参加したい」に○をつけた）人のみに回答を求めた⁹。前述のボランティア動機に関する先行研究を参考に、震災ボランティア活動に参加したいと思った理由をたずねる12項目を独自に用意し（具体的内容は表1参照）、各項目について「全く当てはまらない（1）」から「非常によくあてはまる（5）」までの5段階評定で回答を求めた。

A-（3）震災ボランティア活動への参加の有無：実際に震災ボランティア活動に参加したことがあるかどうかを2件法にてたずねた。「したことがある」場合は引き続き質問紙Bへの回答を求めた（参加群）。「したことがない」場合は引き続き質問紙Cへの回答を求めた（不参加群）。

この他に、冒頭で、震災発生以前の継続的ボランティア活動経験の有無、大学名、学年、性別、年齢、震災前の住所（市町村まで）をたずねた。

2) 質問紙B：A-（3）で参加経験があった者（参加群）のみが回答した。

B-（1）参加前の震災ボランティア活動に対する印象（イメージや気持ち）：震災ボランティア活動に参加する前に抱いていた、震災ボランティア活動に対するイメージや気持ちをたずねた。水野・加藤（2007）で使用されたボランティア活動のイメージに関する質問項目および長須・蔵下・松原（1998）のボランティアという言葉のイメージに関するSD法の項目を参考に、本研究の遂行にかかわった大学生たちからの意見に基づき22項目用意し（表2参照）、各項目について「全く当てはまらない（1）」から「非常によくあてはまる（5）」までの5段階評定で回答を求めた。

⁹ 本調査では310名がこの条件に該当した。条件に該当しない者が回答していた場合は、その回答者のこの部分の回答は無回答扱いとした。

B-（2） 一番最初に参加した震災ボランティア活動の詳細：①参加時期（自由記述）、②活動地区（自由記述）、③活動内容（リストより複数選択可）、④移動手段・時間や作業時間、これらへの負担感など、⑤被災者との接触の有無、をたずねた。このうち本論文でとりあげたのは、①④⑤であった。④については、移動費用の負担感、移動時間の負担感、作業時間の負担感に関してそれぞれ「全く負担ではなかった（1）」から「非常に負担だった（4）」までの4段階評定で回答を求めた部分を用いた。

B-（3） 最初に活動参加した後の活動に対する印象（イメージや気持ち）：上記B-（1）で用いた22項目に加え、参加後の気持ちに関する5項目（満足した、多くを学んだ、大変だったなど）について、B-（1）と同じ回答形式で回答を求めた。

B-（4） 初回の活動参加に至る経路（参加窓口）：参加方法について、「大学設置のボランティアセンターを通して」「一般のボランティアセンターを通して」「その他（自由記述）」から一つを選択するよう指示した。

B-（5） 再参加の有無：初回の活動参加後、再び震災ボランティア活動に参加したか否か、再参加した場合はその回数をたずねた。

この他に、大学のボランティアセンターに関する知識やイメージをたずねたが、本研究では分析対象としなかった。

3) 質問紙C：A-（3）で参加経験のなかった者（不参加群）のみが回答した。

C-（1） 震災ボランティア活動に対する印象：B-（1）と同じ質問であった。

C-（2） 震災ボランティア活動への不参加の理由：不参加の理由について、リスト（付表3参照）より選択させた（複数選択可）。

この他に、大学のボランティアセンターに関する知識やイメージをたずねたが、本研究では分析対象としなかった。

結 果

1. 回答者の属性や震災ボランティア活動等への参加状況の概要

回答者の出身地については、宮城県出身者が273名（78.0%）、福島県出身者が23名（6.6%）、山形県出身者が20名（5.7%）と、90%以上が南東北出身者であった。学年の内訳は1年生158名（45.1%）、2年生97名（27.7%）、3年生84名（24.0%）、4年生10名（2.9%）、無回答1名（0.3%）であった。震災以前の継続的ボランティア活動経験の有無については、経験ありの者は46名（13.1%）、なしの者は300名（85.7%）、無回答4名（1.1%）であった。

震災ボランティア活動への参加経験については、参加した者（参加群）114名（32.6%）、参

加していない者（不参加群）236名（67.4%）であった。初回に参加した震災ボランティア活動への参加窓口については、大学のボランティアセンターから参加した者は24名、一般のボランティアセンターから参加した者は42名、その他が43名であった。その他のうち31名は友人・先輩・部活等での声かけによるものであり、これらは「人づて」というカテゴリに分類した。初回に参加した活動の内容や参加時期については、本論文の分析では扱わないが、参考資料として付表1および付表2に示した。

参加群のうち、再参加ありと回答した者は48名、再参加なしと回答した者は59名であった。再参加の回数は、1回が10名、2回が17名、3回が5名、4回が3名で、再参加者の7割以上がいずれかに該当した。5回以上は11名で、この中には最大で45回を報告する者（1名）もみられた。

2. 尺度の構成

震災ボランティア活動への参加希望理由をたずねた12項目について因子分析（主成分分解）を行った。固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から4因子解を採用し、バリマックス回転を行った（表1）。因子分析の結果、いずれかの因子に対する因子負荷量の絶対値が.40以上であることを基準に項目選択を行った。第1因子には、世界観や視野を広げるため、将来のため、幅広い年齢層の人との交流の3項目が高く負荷しており、これらはVFIの知識機能、キャリ

表1. 震災ボランティア活動への参加希望理由の因子分析結果
(主成分分解, バリマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	h^2
自己向上 ($\alpha=.77$)					
4) 自分の世界観や視野を広げたいから	.88	.06	.06	-.04	.78
3) 自分の将来のためになるから	.81	.05	-.01	.01	.66
5) 幅広い年齢層の人と交流できると思ったから	.76	.06	.06	.20	.63
周囲からの影響 ($\alpha=.62$)					
8) 周りの友だちが行っていたから	-.02	.83	-.04	.01	.69
9) 周りの人に誘われたから	.05	.82	.05	.07	.68
10) 時間に余裕があったから	.08	.56	.12	.04	.33
思い入れ ($\alpha=.51$)					
2) 動かすにはいられない衝動にかられたから	.15	-.03	.71	-.10	.53
12) 震災被害のあった地域に、思い入れがあったから	-.11	.02	.69	.11	.50
1) 人助けをしたいという気持ちが強かったから	-.01	.11	.67	-.21	.51
11) 震災ボランティアに行った人の話を聞いて興味を持ったから	.21	.36	.43	.09	.37
報酬期待 ($\alpha=.64$)					
7) 何かしらのお礼がもらえると思ったから	-.06	.17	-.07	.86	.77
6) 大学の単位になるから	.21	-.02	-.04	.83	.73
二乗和	2.13	1.86	1.64	1.54	7.17
寄与率(%)	17.78	15.46	13.70	12.83	59.78

ア機能、社会的機能を意味するとみなしうる項目群であった。そこでこれらをまとめて「自己向上」と命名した。第2因子は、周囲の人からの影響に関する項目がとくに高く負荷しており、「周囲からの影響」と命名した。第3因子は、衝動や思い入れ、援助に対する意欲・関心の高さに関する項目が高く負荷しており、「思い入れ」と命名した。第4因子はお礼や単位を得るためという内容の項目が高く負荷しており、「報酬期待」と命名した。下位尺度得点は、各因子を構成する項目に対する評定値の合計を項目数で除算して算出した。高得点ほど、当該の事柄をより強く意識していることを示している。α係数は「思い入れ」で.51と低かったが、これ以外は.62～.77であった（表1参照）。「思い入れ」については、構成項目（項目間の相関は $r=.18\sim.33$ ）のいずれかを除いてもこれ以上のα係数改善はみられなかったため、以降では、この下位尺度得点は参考値として扱うこととした。

震災ボランティア活動に対する印象（イメージや気持ち）をたずねた22項目について因子分

表2. 震災ボランティア活動に対する印象の因子分析結果
(主成分解, プロマックス回転後の因子パターン)

	震災ボランティア活動 初回参加前 (注)				震災ボランティア活動 初回参加後				
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
やりがい	(α=.79)				(α=.85)				
20)役に立てることへの喜び	.81	.05	-.08	-.01	.87	.03	.13	-.25	
21)前向きな気持ち	.81	.02	-.19	.05	.77	.06	-.06	-.25	
5)充実感が得られる	.70	.08	-.01	-.18	.81	-.19	.13	.02	
19)使命感にあふれている	.68	.11	.18	-.05	.75	-.06	-.03	.08	
4)学生ボランティアの活躍は欠かせない	.65	-.07	.05	.00	.66	-.16	.02	.07	
17)やり遂げる自信がある	.44	-.25	-.22	.03	.56	-.07	-.24	-.07	
力不足・無力感	(α=.69)				(α=.75)				
13)被災者に受け入れられるか不安	.03	.78	-.27	-.03	.00	-.06	.84	.02	
18)相手の迷惑になる	-.09	.71	.11	-.08	-.01	.05	.78	.16	
12)自分の力で役に立てそうもない	-.16	.64	.12	-.08	.07	-.07	.79	-.15	
負担感	(α=.68)				(α=.64)				
7)自分の時間がなくなる	-.04	.03	.77	-.12	-.22	.07	-.05	.73	
8)準備が大変である	.01	-.05	.65	.23	.21	.12	.13	.55	
22)やる気がおきない	-.23	.12	.63	-.16	-.22	-.14	.28	.48	
6)お金がかかる	-.03	-.01	.56	.16	-.08	-.10	-.05	.74	
内容の過酷さ	(α=.59)				(α=.72)				
1)活動内容は簡単である	.19	.08	.20	-.78	.09	-.74	.00	.13	
2)過酷な内容である	.17	-.11	.17	.67	-.09	.77	-.16	.02	
9)危険を伴う	.06	.04	.33	.60	.18	.79	-.12	.06	
3)誰でも簡単に参加できる	.29	-.06	.07	-.52	.29	-.66	-.06	.08	
<削除項目>									
* 10)周りの人から賞賛される	.43	-.20	.61	-.12	.38	-.03	-.35	.55	
* 11)家族に反対される	-.13	.35	.12	.23	-.10	.44	-.06	.09	
* 15)強い意志が必要である	.38	.34	-.06	.35	.63	.29	.08	.15	
* 16)悲惨な状況をみるのがつらい	.29	.69	-.05	-.05	.22	.29	.30	.29	
** 14)二次災害(余震・津波・土砂崩れ・交通機関の運行停止など)の心配	.08	.51	.17	.15	.01	.67	.16	-.05	
因子間相関									
	F1	—	-.18	.01	.07	—	.09	-.22	.04
	F2		—	.32	.26		—	.32	.31
	F3			—	.18			—	.34

(注)初回参加前の分析には、不参加者のデータも用いた。

初回参加後の分析には、参加経験のある者のデータのみを用いた。

* 初回参加前後いずれかの分析で、単一の因子への.40以上の負荷がみられなかった項目

** 初回参加前後で、高い負荷を示す因子が異なる項目

析（主成分分解）を初回活動参加前の回答および参加後の回答それぞれについて行った。いずれの場合も、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から4因子解を採用し、プロマックス回転を行った（表2）。因子分析の結果、いずれかの因子に対する因子負荷量の絶対値が.40以上であることを基準に（i.e.、各因子に対する因子負荷量の絶対値がいずれも.40未満であった項目と、複数の因子に対する因子負荷量の絶対値が.40以上の項目を除いて）、項目選択を行った。また、参加前後で含まれる因子が異なる項目は削除し、参加前後で共通の項目のみ採用することとした。

参加前後ともに第1因子には、役に立てることへの喜びや前向きな気持ち、充実感などの6項目が高く負荷しており、「やりがい」と命名した。参加前の第2因子（参加後は第3因子）は、被災者に受け入れられるか不安、相手の迷惑になるなどの3項目が高く負荷しており、「力不足・無力感」と命名した。参加前の第3因子（参加後は第4因子）は、自分の時間がなくなる、準備が大変であるなどの4項目が高く負荷しており、「負担感」と命名した。参加前の第4因子（参加後の第2因子）は活動内容は簡単である（逆転項目）、過酷な内容であるなどの4項目が高く負荷しており、「内容の過酷さ」と命名した。下位尺度得点は、評定値が高いほど当該のことがらを高く評価していることを示すよう逆転項目（項目1と3）の得点処理を行い、各因子を構成する項目に対する評定値の合計を項目数で除算して算出した。 α 係数は.59～.85であった（表2参照）。

3. 震災ボランティア活動への参加にかかわる要因

震災ボランティア活動に参加した者（参加群）、参加していない者（不参加群）の2群を判別するために、言い換えれば、震災ボランティア活動への参加状況にかかわる要因を探るために、参加群=0、不参加群=1を目的変数とするロジスティック回帰分析を行った。なお、説明変数としては、参加意欲（全期間の平均を用いた）、参加希望理由の3下位尺度、活動に対するイメージの4下位尺度に加えて、カテゴリ変数として性別（男=0、女=1）、震災前の継続的ボランティア活動経験（あり=0、なし=1）をとりあげた。欠損値を含むデータは削除されたため、分析に用いたデータは、参加群が100名、不参加群が182名であった¹⁰。群別の説明変数の得点平均および目的変数と各カテゴリ変数とのクロス集計の結果を表3・表4に示す。

定数項のみを含んだ回帰モデルに対する全ての説明変数を含めたフルモデルの対数尤度差の

¹⁰ 脚注9で述べたとおり、参加希望理由に関する質問への回答は、設定された5期間の1期間でも参加意欲を示した者のみからのものである。したがって、全期間を通じて参加意欲がなかった者は本分析および再参加にかかわる分析から除外された。なお、初回参加に関する分析で用いられたデータにおける参加意欲得点の範囲は1.60～4.00であり、再参加に関する分析で用いられたデータについては、2.20～4.00であった(理論上の得点可能範囲は1.00～4.00)。

表3. 震災ボランティア活動参加群別の
各変数の平均(SD)

	震災ボランティア活動	
	参加群 (n=100)	不参加群 (n=182)
参加意欲(全期間平均)	3.26 (0.40)	2.92 (0.40)
参加希望理由		
自己向上	3.16 (1.03)	3.03 (0.87)
周囲からの影響	2.72 (0.98)	2.28 (0.91)
報酬期待	1.27 (0.48)	1.40 (0.61)
思い入れ[参考]	3.55 (0.71)	3.28 (0.71)
参加前の印象		
やりがい	3.72 (0.62)	3.52 (0.63)
力不足・無力感	2.78 (0.87)	2.79 (0.79)
負担感	2.32 (0.75)	2.77 (0.69)
過酷な内容	2.99 (0.90)	3.39 (0.60)

表4. 震災ボランティア活動への参加の有無と
カテゴリ変数のクロス集計表

	震災ボランティア活動		合計
	参加群 (n=100)	不参加群 (n=182)	
性別	男	24	66
	女	76	216
震災前の継続的 ボランティア活動経験	あり	25	35
	なし	75	247

表5. 震災ボランティア活動への参加・不参加に影響を及ぼす要因
(ロジスティック回帰分析)

	B	S.E.	Wald	df	p	Exp(B)	Exp(B) の 95% 信頼区間	
							下限	上限
性別(0=男, 1=女)	.057	.372	.023	1	.879	1.058	.510	2.196
震災前の継続的ボランティア活 動経験(0=あり, 1=なし)	2.085	.468	19.879	1	.000	8.048	3.218	20.130
参加意欲(全期間平均)	-1.854	.433	18.320	1	.000	.157	.067	.366
自己向上	.003	.175	.000	1	.984	1.003	.713	1.413
周囲からの影響	-.544	.173	9.935	1	.002	.580	.414	.814
報酬期待	.393	.300	1.724	1	.189	1.482	.824	2.666
やりがい	-.256	.255	1.011	1	.315	.774	.470	1.275
力不足・無力感	-.286	.211	1.830	1	.176	.751	.497	1.137
負担感	.605	.242	6.268	1	.012	1.831	1.140	2.940
過酷な内容	.800	.235	11.622	1	.001	2.226	1.405	3.525
(定数)	2.950	1.800	2.686	1	.101			

目的変数については参加群=0, 不参加群=1とした。

検定統計量は $\chi^2(10, N=282) = 104.89$, $p < .001$ であり、モデルの判別可能性が支持された。決定係数については Nagelkerke $R^2 = .43$ であった。また、Hosmer-Lemeshow の適合度検定により、モデルがデータに適合していることが確認された [$\chi^2(8, N=282) = 2.92$, $p = .940$]。予測正答率は、参加群62.00%、不参加群86.26%、全体では77.66%であった。各説明変数に関する結果を表5に示す。

説明変数のうち量的変数については、オッズ比 ($Exp(B)$) が1よりも小さい場合は、当該の説明変数が参加を促進する効果を、1よりも大きい場合は参加を抑制する効果をもつことを意味している。Wald検定の結果、震災前の継続的ボランティア活動経験の有無、参加意欲の程度、参加希望理由の周囲からの影響、活動への印象の負担感および過酷な内容が2群の判別に役立つことが示された。

以上により、震災前から継続的にボランティア活動を行っている者ほど、全体として参加意欲が高いほど、周囲の人からの影響を強く意識しているほど、活動に対するイメージとしては負担感や活動内容の過酷さの印象が低い者ほど、震災ボランティア活動に参加したと考えられる。

4. 震災ボランティア活動への再参加にかかわる要因の検討

震災ボランティア活動への再参加あり群となし群の2群を判別するために、つまり震災ボランティア活動への再参加にかかわる要因を検討するために、再参加の有無(あり群=0、なし群=1)を目的変数とするロジスティック回帰分析を行った。説明変数としては、参加意欲(全期間の平均を用いた)、参加希望理由の3下位尺度、初回参加の際の移動費用の負担感、移動時間の負担感、作業時間の負担感、初回参加前後での活動に対する印象変化量(参加後の得点から参加前の得点を減じたものを4下位尺度分)に加えて、カテゴリ変数として性別(男=0、女=1)、震災前の継続的ボランティア活動経験(あり=0、なし=1)、初回参加窓口(ボランティアセンター(大学・一般)=0、人づて(教員、サークル、家族、友人)=1)、震災ボランティア活動における被災者との接触(あり=0、なし=1)をとりあげた。なお、分析に用いたデータは、震災ボランティア活動に参加した経験のある者で、初回参加時期が8月までであった者に限定した。参加時期が9月であった者は、調査実施までの期間の短さを考慮して、再参加の有無にかかわる分析からは除外することとした。その他欠損値を含むデータも除かれたため、最終的に分析に用いたデータでは、再参加あり群が33名、なし群が36名となった。群別の説明変数の得点平均および目的変数と各カテゴリ変数とのクロス集計の結果を表6・表7に示す。

定数項のみを含んだ回帰モデルに対する全ての説明変数を含めたフルモデルの対数尤度差の検定統計量は $\chi^2(15, N=69) = 30.44$, $p < .05$ であり、モデルの判別可能性が支持された。決定係

表6. 震災ボランティア活動再参加群別の
各変数の平均(SD)

	震災ボランティア活動 再参加	
	あり群 (n=33)	なし群 (n=36)
参加意欲(全期間平均)	3.41 (0.36)	3.17 (0.47)
参加希望理由		
自己向上	3.43 (0.96)	2.83 (1.13)
周囲からの影響	2.88 (0.82)	2.70 (1.07)
報酬期待	1.29 (0.43)	1.26 (0.51)
思い入れ[参考]	3.65 (0.73)	3.56 (0.73)
初回活動の負担感		
移動費用の負担感	1.36 (0.65)	1.31 (0.52)
移動時間の負担感	1.79 (0.78)	1.56 (0.69)
作業時間の負担感	2.00 (0.71)	1.75 (0.77)
参加前後の印象の変化(参加後-参加前)		
やりがい	0.22 (0.46)	0.33 (0.41)
力不足・無力感	-0.66 (0.72)	-0.56 (1.01)
負担感	-0.15 (0.53)	-0.45 (0.75)
過酷な内容	-0.17 (0.83)	-0.53 (0.89)

表7. 震災ボランティア活動への再参加の有無と
カテゴリ変数のクロス集計表

	震災ボランティア活動 再参加		合計	
	あり群 (n=33)	なし群 (n=36)		
性別	男	6	9	15
	女	27	27	54
震災前の継続的 ボランティア活動経験	あり	7	7	14
	なし	26	29	55
初回参加窓口	VC(注)	19	29	48
	人づて	14	7	21
被災者との接触	あり	31	29	60
	なし	2	7	9

(注)VC:ボランティアセンター

数についてはNagelkerke $R^2 = .48$ であった。また、Hosmer-Lemeshowの適合度検定により、モデルがデータに適合していることが確認された [$\chi^2(8, N=69) = 5.22, p = .734$]。予測正答率は、再参加あり群72.73%、なし群75.00%、全体では73.91%であった。各説明変数に関する結果を表8に示す。

先の分析と同様、説明変数のうち量的変数については、オッズ比 ($Exp(B)$) が1よりも小さい場合は、当該の説明変数が再参加を促進する効果を、1よりも大きい場合は再参加を抑制する効果をもつことを意味している。Wald検定の結果、参加意欲の程度、初回参加窓口、過酷な内容という活動に対する印象について活動前後の変化が有意に、被災者との接触については有意傾向で、2群の判別に役立つことが示された。

以上により、参加意欲が高いほど、初回に人づてに参加をした人ほど、活動において被災者との接触があった人ほど、過酷な内容という印象が高まる（あるいはこの印象の低下の度合いが低い）ほど、再参加をしたと考えられる。

考 察

本研究では、宮城県内の大学に在籍する大学生の東日本大震災における震災ボランティア活

表 8. 震災ボランティア活動への再参加の有無に影響を及ぼす要因
(ロジスティック回帰分析)

	B	S.E.	Wald	df	p	Exp(B)	Exp(B) の 95% 信頼区間	
							下限	上限
性別 (0=男, 1=女)	.261	.870	.090	1	.764	1.298	.236	7.137
震災前の継続的ボランティア活動経験 (0=あり, 1=なし)	-.216	.858	.064	1	.801	.806	.150	4.326
参加意欲 (全期間平均)	-2.189	.899	5.932	1	.015	.112	.019	.652
自己向上	-.600	.385	2.422	1	.120	.549	.258	1.168
周囲からの影響	-.486	.392	1.538	1	.215	.615	.285	1.326
報酬期待	-.110	.816	.018	1	.893	.896	.181	4.438
初回参加窓口 (0=ボランティアセンター, 1=人づて)	-2.075	.942	4.853	1	.028	.126	.020	.795
被災者との接触 (0=あり, 1=なし)	2.948	1.703	2.997	1	.083	19.061	.677	536.434
移動費用の負担感	.260	.687	.143	1	.705	1.297	.338	4.981
移動時間の負担感	-.345	.483	.510	1	.475	.709	.275	1.824
作業時間の負担感	.640	.555	1.328	1	.249	1.896	.639	5.626
やりがい差 (参加後-参加前)	.854	.866	.973	1	.324	2.350	.430	12.837
力不足・無力感差 (参加後-参加前)	.870	.567	2.354	1	.125	2.388	.786	7.258
負担感差 (参加後-参加前)	-.423	.663	.406	1	.524	.655	.179	2.406
過酷な内容差 (参加後-参加前)	-1.217	.466	6.822	1	.009	.296	.119	.738
(定数)	9.674	3.629	7.105	1	.008			

目的変数については再参加あり群=0, なし群=1とした。

震災ボランティア活動に対する印象の差得点は、初回参加後から初回参加前の値を減じたものである。

動への参加およびその後の再参加を左右する要因の検討を行った。初回参加については、震災前からの継続的なボランティア活動への参加経験、参加意欲の高さ、周囲の人からの影響による動機づけの高さ、活動に対する負担感や活動内容の過酷さの印象の低さがこれを促進する可能性が示された。

継続的なボランティア活動経験に関しては、関東と関西の大学生の東日本大震災におけるボランティア活動への参加状況を検討した桜井 (2013) の研究においても、活動参加に向かう要因の一つとなりうる事が示されている。そして、継続的な活動者は自分がボランティア活動をする人間であるという役割アイデンティティを持っているので、震災ボランティア活動にも参加したと考察されている。桜井の研究における対象者は関東・関西の大学生であり、また、参加した震災ボランティア活動には募金活動・寄付集めのイベント参加や署名活動なども含まれており、必ずしも被災地での手伝いに参加したものばかりではない。これに対し、本研究は

被災地の大学生による現地でのボランティア活動参加を扱ったものであるが、継続的なボランティア活動経験を有することが、活動参加を促進する要因であったことは、同様に解釈されるものであろう。

また、参加意欲が活動参加に強く影響することは、ボランティア活動一般についての検討においても示されており（高木・玉木、1996）、本研究でも同様の結果が得られた。意欲の高さが震災ボランティア活動への参加を左右する重要な要因であることが確認された。

周囲からの影響に関しては、松下・中川（2007）による研究において類似する要因の影響が報告されている。この研究は、新潟県中越地震を体験し、その後その災害ボランティア活動に参加した看護大学生を対象にインタビュー調査を行ったものである。インタビュー調査の結果に基づき、仲間と思いを共有することが、参加への否定的な思いの解消というプロセスを経て、災害ボランティア活動への参加の決心に至る要因の一つとなりうるということが指摘されている。松下・中川の研究では参加者のみを対象にしており、不参加の者との比較検討までは行われていないが、本研究の結果はこの研究結果を支持するものであった。周囲に活動する友人がいることは身近なモデルの役割を果たすこと、周囲からの誘いが活動参加に踏み切る契機となりえたといえよう。

震災ボランティア活動への印象については、負担感や内容の過酷さの評価が低いことが、参加を促進する要因であることが示された。参加の抑制という視点で言い換えれば、これは、時間のなさ、金銭的負担、準備の大変さ（負担感）や活動自体の大変さ・過酷さといった援助にかかるコストが高いと認識しているほど、参加しなくなるということの意味している。援助にかかるコストが大きいことは援助行動の抑制因である（松本・高木、1981、他）ことを考えれば、妥当な結果と考えられる。

なお、得られるであろう何らかの利益（自己向上や報酬期待）による動機づけや、やりがいの程度および自分では力不足であるという活動に対する認識が活動参加の有無を規定する大きな要因ではなかったのは、緊急性の高い災害ボランティア活動であるためかもしれない。特に自己実現にかかわるような理由・認識は、直接的には影響しにくかったのではないかと考えられる。

次に、再参加を左右する要因についてであるが、参加意欲の高さ、初回の参加が人づてであること、初回の活動において被災者との接触があったこと、過酷な内容という印象が高まる（あるいはこの印象の低下度合いが低い）ほど、再参加を促進することが示された。再参加については、初回参加の場合とは異なる傾向がみられたことは興味深い。具体的には、初回の参加については、過酷さの印象や負担感が低いことが参加を促すことが示唆されたが、再参加においては、過酷さの印象が高まる／低下しすぎない方が参加につながるということが示された点である。東日本大震災における被災地支援について検討した山本・兪・井上・松井（2012）の研究結果

では、支援活動の継続意欲は、被災地のために十分に役立てなかったといった感覚（不全感）により高まるが、被災地の役に立ったという充実感とは関連性が示されなかった。本研究で扱われた、簡単な活動ではなく過酷なものであるという印象の強さ、つまり活動負荷の高さは、充実感を得るというよりも不全感の生起に結びついていたのではないだろうか。そのように考えれば、研究対象（南関東地域の成人）や支援内容（主に募金）が異なるものの、山本他の研究結果と整合する結果が認められたといえよう。

このように参加活動に一定以上の負荷があることに活動の価値を感じ、まだ支援の余地が残されている、自分が役に立てることがあるという認識が、再参加に結びついていく可能性が示された点は、震災ボランティア活動参加に関する教育的な指導においても唆深いものと思われる。発災後、宮城県内の大学ではボランティアセンター（あるいはその役割を担う部署）が設置されたり、当初からある部署の役割が強化・拡大されるなど、大学生の震災ボランティア活動を支える仕組みの整備・充実が進められた¹¹。大学内に存在するこれらの部署（参加窓口）は、大学生たちにとって身近なものであり、相互にコンタクトをとりやすいものである。学修成果の実践や将来を担う青年育成という目的に適う活動を実現していくためには、そのような利点を活かし、活動に参加する前の講習（安全な活動のための指導など）に加え、参加後の振り返りをしっかりと行うことにも力を入れることが重要であると考えられる。活動の中で自分ができたこと、できなかったことを明確にし、今後の活動でさらに役に立てる余地を見いだせるような働きかけが、適度な充実感ともに不全感も生じさせ、一度限りの参加で満足することなく継続的な参加を促して、被災者にとって助けとなり、そして長期的な意味で本人の成長にもつながる有益な活動参加に結びつくのではないだろうか。

この他、人づての参加については、組織的な環境ボランティア活動の場合の検討結果を参照すると、その活動継続意欲はボランティア組織への帰属意識の高さにより左右されることが示されている（安藤・広瀬, 1999）。本研究の場合は必ずしも組織的な活動に参加しているわけではないが、周囲からの誘いによる参加は、声掛けを行った相手（自分を誘った人）との関係性への配慮から、継続される可能性が高まるのかもしれない。被災者との接触に関しては、接触の中身についての詳細な検討が必要ではあるが、これが好ましいものであった場合にはとくに再参加を促進したと考えられる。高木・玉木（1995）は、阪神・淡路大震災の避難所でのボランティア活動者に対するインタビュー調査を行い、活動満足の理由には、被災者からの感謝や活動を通じた他者との交流が多く報告されることを示している。そしてこのことが好ましい援助経験となり、他のボランティア活動への参加意向を促進する可能性を述べている。参加意欲の高さについては、初回参加に関する結果同様、妥当な結果と考えられた。なお、初回参加時

¹¹ 本研究にかかわった大学生による、県内7大学への聞き取り調査結果による。

の移動費用や移動・作業時間の負担感については、再参加を左右する主要な要因とはならなかった。コスト認識の高さは初回参加を抑制するが、一度参加した経験がある場合は、上述のような要因の方が再参加を左右する重要な要因であったといえよう。

最後に本研究の課題点について述べる。本研究は、1年次生向けの実習科目の一環として計画・実施された調査データに基づくものである。質問内容の検討に際しては、先行研究を参考にはしたものの、本研究の計画・実施にかかわった受講生たちの意見をできる限り反映するようにした。このため、先行研究と十分に対応づけることが困難なところがある。また、倫理的な配慮から、VFIに含まれていた防衛機能（罪悪感などの不快感情の低減など）は、本研究の参加希望理由には含めなかった。しかし、冒頭で述べたように、非被災地からは被災者とみられる一方、被災地内には自分よりも被害の大きい人がいることに、罪悪感や居心地の悪さのようなものを感じた者も少なからずいたと考えられる。このような罪悪感に関して小谷（2014）は、大災害時にはよくみられるものであり、自責や経験の言語化回避、相互理解の欠落により罪悪感を深め、心理的な孤独が高まるという負の連鎖を生みやすいことを指摘している。したがって、罪悪感にかかわる問題は、被災地の大学生の震災ボランティア活動が本人にとっての適応的な活動成果に結びつくかという観点からは検討すべき重要な要素となろう。

この他、参加意欲の高さ（調査時に設定した期間全体の平均）は、初回参加のみならず、再参加においても参加を促進する要因であった。初回参加および再参加において意欲を高める要因については未検討であったが、意欲が重要な要因であるならば、これは今後検討していくべき課題である。加えて、活動の内容や場所、時期など初回参加時の活動状況の多様性を考えると、再参加については具体的な経験内容との関連の確認も必要であろう。

引用文献

- 安藤香織・広瀬幸雄 1999 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因
社会心理学研究, **15**, 90-99.
- 浅川潔司・仲上馨子・古川雅文 1998 大学生の共感性とボランティア活動の関係 学校教育学研究,
10, 89-93.
- 渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・八ツ塚一郎 1995 阪神大震災におけるボランティア組織の参与観察
研究—西宮ボランティアネットワークと阪神大震災地元NGO救援連絡会議の事例— 実験社会心理
学研究, **35**, 218-231.
- Clary, E., Snyder, M., Ridge, R.D., Copeland, J., Stukas, A.A., Haugen, J., & Miene, P. 1998 Understanding
and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Psychology*,
74, 1516-1530.
- 小谷英文 2014 集団精神療法の進歩—引きこもりからトップリーダーまで— 金剛出版
- 松本敦・高木修 1981 順社会的行動の動機の構造（2）—非援助動機について— 日本グループ・
ダイナミクス学会第29回大会発表論文集, 40-41.
- 松下由美子・中川泉 2007 看護学生の災害支援ボランティア参加に至る情緒的プロセスと動機づけ
日本看護学教育学会誌, **16**（3）, 57-68.
- 水野邦夫・加藤登志郎 2007 ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか? —ボ
ランティア活動経験とパーソナリティ特性、社会的スキル、充実感、ボランティア活動観の関連性か

- らみた一考察一 聖泉論叢, **15**, 141-156.
- 文部科学省 2011 東日本大震災による大学等の被害状況とこれまでの取組状況 中央教育審議会大学分科会 (第96回) 配布資料 (資料1-1)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/_icsFiles/afiedfile/2011/06/01/1306377_1_1.pdf
 (2013年5月3日閲覧)
- 森上幸夫 1998 ボランティアためらい症候群—女子大学生レポートの分析—なにもしないのもつらかった—被災社会心理学者・連 (著) きずな—地震の傷抱き六甲山眠る— ナカニシヤ出版 pp.98-109.
- 長須正明・蔵下智子・松原達哉 1998 阪神大震災救援ボランティア活動参加者の意識調査 立正大学哲学・心理学会紀要, **24**, 17-50.
- 桜井政成 2013 東日本大震災における大学生の被災地・被災者支援行動 立命館人間科学研究, **28**, 55-65.
- 佐々木美加 1999 阪神大震災における援助行動—共感、危険認知が援助行動に及ぼす影響— 東北福祉大学研究紀要, **24**, 49-59.
- 妹尾香織・高木修 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果—地域で活動するボランティアに見られる援助成果— 社会心理学研究, **18**, 106-118.
- 鈴木勇・菅磨志保・渥美公秀 2003 日本における災害ボランティアの動向—阪神・淡路大震災を契機として— 実験社会心理学研究, **42**, 166-186.
- 高木修 1983 順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学, **24**, 187-207.
- 高木修・玉木和歌子 1995 阪神・淡路大震災におけるボランティア—避難所で活動したボランティアの特徴— 関西大学社会学部紀要, **27** (2), 29-60.
- 高木修・玉木和歌子 1996 阪神・淡路大震災におけるボランティア—災害ボランティアの活動とその経験の影響— 関西大学社会学部紀要, **28** (1), 1-62.
- 玉木和歌子 2000 第7章: ボランティア活動の動機と成果 高木修 (監修)・西川正之 (編著) 援助とサポートの社会心理学 (シリーズ 21世紀の社会心理学4) 北大路書房 pp.82-93.
- 山本陽一・兪善英・井上果子・松井豊 2012 南関東居住者の東日本大震災被災地支援活動の心理過程 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 82.
- 全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター 2012 東日本大震災災害ボランティアセンター報告書 (2012年5月7日更新・電子版)
http://www.shakyo.or.jp/research/2011_pdf/11volunteer.pdf (2014年4月14日閲覧)

(2014年4月28日受領、2014年5月14日受理)
 (Received April 28, 2014; Accepted May 14, 2014)

付表1. 震災ボランティア活動へ初回の参加時期

参加時期	<i>n</i>	%
3月	33	28.9
4月	27	23.7
5月	18	15.8
6月	11	9.6
7月	9	7.9
8月	10	8.8
9月	4	3.5
無回答	2	1.8
計	114	100.0

付表2. 初回に参加した活動の内容（*n*=114, 複数選択可）

活動内容	<i>n</i>	%
マッサージ	38	33.3
子どもと交流	31	27.2
支援物資の仕分け	28	24.6
がれき撤去	27	23.7
泥かき	25	21.9
被災者の話を聞く	17	14.9
子どもへの学習支援	15	13.2
炊き出し	12	10.5
イベント主催・手伝い	12	10.5
チャリティーコンサート	6	5.3
文化財レスキュー	5	4.4
物資調達・運搬・給水	5	4.4
避難所でのボランティア	5	4.4
被災者宅の片付け	4	3.5
写真洗浄	3	2.6
交通整理	3	2.6
仮設住宅の家具準備	2	1.8
その他	11	9.6

付表3. 震災ボランティア活動への不参加の理由に関する各選択肢の選択状況
($n=236$, 複数選択可)

	選択者数	選択率(%)
カ 自分のことで手一杯だったから	110	46.61
ク 場所が遠かったから	92	38.98
イ 参加方法がわからなかったから	85	36.02
キ ボランティアに行くための交通手段がなかったから	74	31.36
シ 悲惨な現状を見て、躊躇してしまったから	62	26.27
エ 二次災害(余震・津波・土砂崩れ・交通機関の運行停止など)が心配だったから	54	22.88
オ 時間がなかったから	48	20.34
ウ ボランティアに行っても、受け入れられるか不安だったから	35	14.83
ケ 必要な道具などの準備が大変そうだったから	32	13.56
ア ボランティアに行く意欲がなかったから	29	12.29
コ ボランティアに行くためのお金がなかったから	13	5.51
サ 周囲の人にボランティアに行くことを反対されたから	13	5.51

Factors affecting the participation in volunteer activities for the areas devastated by the Great East Japan Earthquake: A survey conducted on university students in Miyagi Prefecture

Kazuyo KINO

The purpose of this study was to investigate the factors that encouraged university students in Miyagi Prefecture to join the volunteer activities for the areas devastated by the Great East Japan Earthquake. Three hundred and fifty undergraduates in Miyagi Prefecture were asked to complete a set of questionnaires about the volunteer activities after the Great East Japan Earthquake. The results suggested that students with constant experiences of volunteer activities before, high willingness to participate, some friends who had participated in the activities, and/or less severe impression on the activities, were tend to join the activities. As for factors affecting their re-participation, those who had high willingness, participated through someone's introduction, experienced some contact with disaster victims during their volunteer activities, and/or showed less fall in severe impression on the activities, were likely to re-participate in the activities. Discussions here will contribute to future research in terms of undergraduates' participation in disaster volunteer activities.